

平成 29 年度城西短期大学英語教育活動

中島 直樹

1. はじめに

平成 29 年 4 月、城西短期大学において英語力調査が実施され、外国人留学生を除く 74 名の短期大学ビジネス総合学科新入生が受験した。近年、短大を取り巻く環境が大きく変化し、それに伴い様々なタイプの学生が入学するようになった。短大入学生の英語力低下の傾向は年々顕著になり、特に優秀な学生の入学も以前に比べると少なくなった。それに加えて、ある程度基礎力のある学生とあまり基礎力のない学生との差が以前より大きくなったように感じられる。そのため、実際の授業に入る前に学生一人一人の英語力がどの程度であるかをあらかじめ認識しておくことがより必要になった。このような観点から、本学では新入生全員に対して毎年英語力調査を実施しており、その調査結果を基に、坂戸キャンパスの一年次の必修科目である TOEIC イングリッシュ I A・I B（日本人教員による TOEIC のリスニングとリーディングに重点を置いた授業）と TOEIC イングリッシュ I C・I D（外国人教員によるコミュニケーションに重点を置いた授業）を能力別のクラス編成にし、これまで以上に授業の効率化と学生のレベルアップを図っている。

本論は、本年度学生の英語力調査の結果を、昨年度あるいはそれ以前の学生のそれと比較することにより、本年度に入学した学生の英語力がこれまでの学生とどう違うのかということを検討すると共に、一年後の最終授業時に前回と全く同じ条件で同じ試験を実施して、どれだけスコアが伸びたかを調査し、本学学生の英語力の特徴を明らかにしようとする試みである。それに加えて、12 月に本学で実施された TOEIC テストのスコアも比較・検討し、今年度新入生の英語力の新しい傾向を分析していきたい。

2. 過去 15 年間の英語力調査の結果を振り返って

はじめに、平成 14 年度の英語力調査から振り返ってみたい。平成 14 年度に英語力調査の問題を改訂し、それ以降、継続して現在まで同じ問題を使用しているため、年度ごとの比較が可能と

なっている。出題形式は全問マークシート方式、試験時間は1時間、全50問で100点満点の試験であった。93名が受験し、全体の平均点は約56.9点であった。学科別の受験者数と平均点は表1の通りである。

表1 平成14年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
経営情報実務	67名	約57.8点
現代文化	26名	約54.7点
全 体	93名	約56.9点

実際の得点分布を見てみると、かなり大きな広がりを持っていたことが分かる。90点以上のかなり基礎力のある学生が6名、次いで75点から89点までのある程度基礎力のある学生が10名、29点以下のほとんど基礎力のない学生が7名おり、その中間に30点から74点までの中間層があった。しかし、よく見るとその中間層の中にもいくつかの山があった。60点から74点までの上位の層(26名)と45点から59点までの中位の層(24名)と30点から44点までの下位の層(20名)とにおおよそ分類でき、この3つの層が平成14年度的女子短期大学部新入生に占める割合は実に75パーセントを超えていた。

次に、平成15年度の結果について見てみたい。59名の新入生全員が受験し、全体の平均点は約54.5点であった。学科別の受験者数と平均点は表2の通りである。

表2 平成15年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
経営情報実務	47名	約55.0点
現代文化	12名	約52.6点
全 体	59名	約54.5点

平成14年度の英語力調査の平均点と比較すると、経営情報実務学科においては2.8点、現代文化学科においては2.1点、全体では2.4点下がった。また、この年度も経営情報実務学科の平均点の方が現代文化学科のそれより高い結果となった。

得点分布グラフの形にもある程度の変化が見られた。14年度と違う点は、90点以上のかなり基礎力のある学生がひとりもいなくなった(14年度は6名)ことと、中間層の領域の形が逆転したことであった。30点から74点までの中間層にはいくつかの山があることが14年度の英語力調査の検証で分かっていた。そして、14年度は60点から74点までの上位の層に26名、45点から59点までの中位の層に24名、30点から44点までの下位の層に20名の学生がいて、得点層が上位になればなるほどそれだけ学生数も多かったが、平成15年度は上位の層に16名、中位

の層に 17 名、下位の層に 17 名と、中間よりやや下に比重が移っていた。

次に、平成 16 年度の結果について検討したい。43 名の新生生が受験し、全体の平均点は約 50.5 点であった。学科別の受験者数と平均点は表 3 の通りである。

表 3 平成 16 年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
経営情報実務	33 名	約 50.5 点
現 代 文 化	10 名	約 50.4 点
全 体	43 名	約 50.5 点

平成 15 年度の平均点と比較すると、経営情報実務学科においては 4.5 点、現代文化学科においては 2.2 点、全体では 4.0 点下がった。平成 14 年度から年々下降の一途をたどっていて、短大に入学してくる学生の英語基礎力が年々低下していることを如実に示す結果となっていた。

全体の得点分布は基本的には 15 年度とそれほど変わっておらず、15 年度をほぼ継承していた。90 点以上のかなり基礎力のある学生がひとりもいなくなったことも、中間層の形が逆転したことも 15 年度と同様であった。それに加えて、75 点から 89 点までのある程度基礎力のある学生が 5 名となり、前年より 3 名減少してしまった。中間層の中を詳しく見てみると、60 点から 74 点までの上位の層に 9 名、45 点から 59 点までの中位の層に 13 名、30 点から 44 点までの下位の層に 13 名の学生がいた。平成 14 年度には、得点層が上位になればなるほどそれだけ学生数も多かったが、平成 15 年度から中下位に比重が移り、その傾向は平成 16 年度も続いていた。

次に、平成 17 年度の結果について検討したい。80 名が受験し、全体の平均点は約 56.5 点であった。学科別の受験者数と平均点は表 4 の通りである。

表 4 平成 17 年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
経営情報実務	57 名	約 56.9 点
現 代 文 化	23 名	約 55.5 点
全 体	80 名	約 56.5 点

前年度の平均点と比較すると、経営情報実務学科においては 6.4 点、現代文化学科においては 5.1 点、短大全体では 6.0 点上昇した。平成 12 年度から短大入学生の英語力調査のデータを探っているが、前の年の平均点を上回ったのは初めてのことであった。平成 17 年度は、奨学金制度が充実していたため、高等学校の評定平均値 3.5 以上の学生が多く入学し、基礎学力を持って入学した新生生たちが平均点を押し上げた。数値的に見て、平成 14 年度の水準まで上昇した結果となった。全体の得点分布を見ても、短大全体では 6.0 点も平均点が上昇したので、まったく異

なった形になった。90点以上はかなり基礎力のある学生はひとりもいなかったが、75点から89点までのある程度基礎力のある学生が19名おり、この層が本学を引っ張る牽引車的存在になっていた。受験者数が80名なので、約4人に1人がここに属していたことになり、この年度の躍進を支えた原動力のひとつになっていた。29点以下のほとんど基礎力のない学生が6名いたが、この割合は16年度とほぼ同じであった。30点から74点までの中間層は55名であった。この中間層の中を詳しく見てみると、60点から74点までの上位の層に18名、45点から59点までの中位の層に16名、30点から44点までの下位の層に21名の学生がいた。16年度は、得点層が下位になればなるほどそれだけ学生数も多かったが、17年度はどの層にもほぼ均等に数が分布していた。平成15年度から中下位に比重が移ってきていて、平均点を下げる最大の理由となっていたが、17年度になってようやくその流れが変わった。

次に、平成18年度の結果について検討したい。82名が受験し、全体の平均点は約48.3点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表5である。

表5 平成18年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	82名	約48.3点

この年度に経営情報実務学科と現代文化学科が統合されてビジネス総合学科が誕生した。新学科になって初めての英語力調査であったが、17年度の平均点約56.5点から8.2点下落の約48.3点となった。17年度にいったん上昇に転じたが、18年度にまた大きく下げた。上昇の流れがわずか一年で途絶えてしまった。

全体の得点分布を見てみると、受験者数は前年とほぼ同数であったにもかかわらず、グラフの形は前年とまったく違うものになっていた。前年はどの層にもほぼ均等に数が分布していた。基礎力のない学生もいたが、基礎力のある学生もほぼ同数いた。特に、前年は75点から89点までのある程度基礎力のある学生が19名もいて、この層が本学の全体的な底上げの役目を果たしていたが、18年度はその層には6名しかいなかった。ピークは40～44点のところであり、16名が集中していた。29点以下のほとんど基礎力のない学生が9名いたが、この層に関しては、前年の6名と大差がなかったと考えてよいであろう。90点以上はかなり基礎力のある学生がひとりもいなかったことも前年と同様であった。中間層の上位の層には15名おり、前年の18名とほとんど変わりはない。しかし、中位の層は前年の16名から7名増の23名、下位の層は21名から8名増の29名となっており、中間層の中でもとりわけ中下位の増加が目についた。つまり、75点から89点までのある程度基礎力のある学生の層が減少した分がここに集まっていたのである。前年度は奨学金制度が充実していた年度であり、高校の評定平均値3.5以上の学生が多く入学し、ある程度基礎力のある学生の層の中核となっていたが、18年度は奨学金制度の廃止

に伴い、その層が激減し、代わりに中間層の中下位の学生が増えた。これが平均点を 8.2 点下げた最大の原因であった。

次に、平成 19 年度の結果について検討したい。受験者数 69 名、全体の平均点は約 51.0 点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表 6 である。

表 6 平成 19 年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	69 名	約 51.0 点

ビジネス総合学科になって 2 回目の英語力調査であったが、前年度の平均点約 48.3 点から 2.7 点上昇の約 51.0 点となった。前年度と比べ、平均点が若干上昇したため得点分布グラフの形にわずかな変化が見られたが、特に大きな変化ではなかった。得点のより低い層により多くの学生が集中するというそれまでの傾向を継承していたと言ってよいであろう。30 点から 74 点までの中間層を見てみると、60 点から 74 点までの上位の層に 12 人、45 点から 59 点までの中位の層に 18 人、30 点から 44 点までの下位の層に 22 人となっており、やはり基礎力のない学生の多さが目立った。75 点から 89 点までのある程度基礎力のある学生の層は、前年の 6 名から 11 名に増加していた。18 年度のピークは 40 ～ 44 点のところであったが、19 年度は 50 ～ 54 点に移動しており、これらが 19 年度の英語力調査の明るい材料であった。

次に、平成 20 年度の結果について検討したい。受験者数 81 名、全体の平均点は約 51.0 点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表 7 である。

表 7 平成 20 年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	81 名	約 51.0 点

受験者数は 12 名増加、平均点は前年とほぼ同じであった。だが、前年度と比べ、得点分布グラフの形はわずかに異なっていた。ピークは 50 ～ 54 点と 40 ～ 44 点のところであり、いずれも 10 名。30 点から 74 点までの中間層を見てみると、60 点から 74 点までの上位の層に 15 人、45 点から 59 点までの中位の層に 23 人、30 点から 44 点までの下位の層に 22 人となっており、中位の層が下位の層を 1 名ではあるが上回った。得点のより低い層により多くの学生が集中しやすい傾向は変わっていなかったが、中位の層が増加したことはよい材料であった。85 ～ 89 点の層に 5 名、90 点以上のかなり基礎力のある学生が 2 名いたことも喜ばしいことであったが、29 点以下のほとんど基礎力のない学生が 11 名（前年は 6 名）おり、平均点が上がらない原因になっていた。かなりできる学生もいたが、それと同数のまったくできない学生もいて、平均すると前年並みであった。

次に、平成 21 年度の結果について検討したい。受験者数 69 名、全体の平均点は約 46.0 点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表 8 である。

表 8 平成 21 年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	69 名	約 46.0 点

受験者数は 12 名減少、平均点は前年と比べ 5 点マイナスであった。得点分布グラフの形も当然異なっていた。前年度のピークは 50～54 点と 40～44 点のところ（いずれも 10 名）にあったが、21 年度は 30～34 点のところへ下がってきており、12 名の学生がここにいた。また、第 2 のピークもその前後の 40～44 点と 20～24 点にあり、低得点層の膨らみが目立った。30 点から 74 点までの中間層を見てみると、60 点から 74 点までの上位の層に 14 名、45 点から 59 点までの中位の層に 14 名、30 点から 44 点までの下位の層に 24 名となっており、やはり下位の層の占める割合がかなり多かった。29 点以下のほとんど基礎力のない学生も 12 名おり、前年と同様に、この層が平均点を大きく押し下げている。90 点以上のかなり基礎力のある学生が 2 名（内 1 名は留学経験者）いたことが唯一の明るい材料であった。

次に、平成 22 年度の結果について検討したい。受験者数 81 名、全体の平均点は約 53.5 点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表 9 である。

表 9 平成 22 年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	81 名	約 53.5 点

受験者数は 12 名増加、平均点は前年と比べ 7.5 点上昇であった。前年と比べて平均点が大きく上昇した年は過去には平成 17 年度のみであったので、これが二度目ということになる。7.5 点の上昇は 17 年度の 6.0 点を上回っていた。平成 17 年度は奨学金制度が充実し、多くの優秀な学生が入学して平均点が上昇した。しかし 22 年度は 17 年度のような奨学金制度はなかったが、大きく平均点が上昇した。その原動力となったのが 3 月の入試で入学した学生達であった。彼らのほとんどが城西大学やその他文系 4 年制大学の受験に失敗し、第二希望で短大に入学した。一度は受験勉強をやった実績と短大卒業後に編入したいという気持ちを持ち合わせた彼らが平均点を押し上げたのだと思う。これまでの短大入学生はいわゆる受験というものを経験しないで入学することが多かった。そのような状況の中で、22 年度は受験に失敗した者たちが新しい風を吹かせてくれた。グラフの形を見てみると、前年度のピークは 30～34 点のところであり、12 名の学生がそこにいた。また、第 2 のピークもその前後の 40～44 点と 20～24 点にあり、低得点層の膨らみが目立っていた。それに対して、22 年度のピークは 50～54 点と 40～44 点のところ

に上がってきていて、10名の学生がここにいた。第2のピークは下方30～34点のところ（前年度のピーク）に9名いたが、70～74点に7名、60～64点に6名、両ピーク間の45～49点に6名おり、前年の下膨れした形とは明らかに異なっていた。29点以下のほとんど基礎力のない学生は前年の12名から8名に減っていた。90点以上のかなり基礎力のある学生は4名おり、前年より2名増えていた。

次に、平成23年度の結果について見てみたい。57名が受験し、全体の平均点は約43.7点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表10である。

表10 平成23年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	57名	約43.7点

受験者数は24名減少、平均点は前年と比べ9.8点下落であった。受験者数は大幅減、平均点も調査を始めて以来過去最低、下げ幅も過去最大であった。前年に7.5点と大幅上昇し、23年度が注目されたが、このような残念な結果であった。過去に平均点が前年より大きく上昇した年度は17年度と22年度の二度であったが、いずれも翌年には大きく平均点を下げていた。特に23年度の下げ幅は大きく、18年度の8.2点下落を上回っていた。平成17年度は、奨学金制度が充実していた年度であり、多くの優秀な学生が入学して平均点が上昇した。また22年度は、4年制大学の受験に失敗して短大第二希望で入学した学生たちが、短大卒業後に4年制大学に編入したいと強く思い、また受験勉強をした経験を活かして平均点を押し上げた。このように考えると、17年度と22年度の二年だけが例外なのであって、当時の短大入学者の英語基礎力は年々著しく下がっていたと言わざるをえない。

得点分布グラフを見てみると、ピークは40～44点のところにあり、12名の学生がここにいた。第2のピークは50～54点のところに8名いたが、1名少ない7名の学生が20～24点のところにいて第3のピークを形成していた。90点以上のかなり基礎力のある学生はいなくなり、最高点は86点、次点は78点であった。グラフの形も以前の下膨れした形にもどってしまった。39点以下の学生が20名もおり、それが全体の35パーセント以上を占めるという散々な結果であった。

次に、平成24年度の結果について見てみたい。54名が受験し、全体の平均点は約44.9点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表11である。

表11 平成24年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	54名	約44.9点

受験者数は3名減少、平均点は前年と比べ1.2点の上昇であった。前年の英語力調査で過去最低を記録し、24年度の結果が注目されたが、受験者数も平均点も前年とほぼ同じ結果となった。依然として短大始まって以来の過去最低水準であった。平均点が45点を下回った年は平成23年と24年の二年だけであり、いかにこの年の短大1・2年生に基礎学力が不足していたのかがよく分かる。得点分布グラフの形を見てみると、前年度と同様ピークは40～44点のところにあり、12名の学生がここにいた。30～34点に8名、50～54点に7名おり、これらが第2のピークを形成していた。第3のピークは65～69点と20～24点にあり、それぞれ6名の学生がいた。最高点は92点、次点は88点であり、その次はずっと下って74点であった。平成14年以来、30点から74点までの層を中間層としてきたが、24年度はその中間層以下が54名中52名を占め、かつてはある程度存在していたそれ以上の層がほぼ消滅してしまった。中間層の中を詳しく見てみると、60点から74点までの上位の層に9名、45点から59点までの中位の層に13名、30点から44点までの下位の層に21名となっていて、やはり下位の層ほど人数が多くなっていた。29点以下のほとんど基礎力のない学生は9名、90点以上のかなり基礎力のある学生は1名であった。

次に、平成25年度の結果について見てみたい。51名が受験し、全体の平均点は約45.8点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表12である。

表12 平成25年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	51名	約45.8点

受験者数は3名減少、平均点は前年と比べ1.2点の上昇であった。過去二年続けて最低レベルに留まっていたが、受験者数も平均点も前年とほぼ同程度であった。これで三年連続45点前後というかつて経験したことのないほどの低い結果となった。グラフの形を見てみると、ピークは40～44点と30～34点のところにあり、それぞれ9名の学生がここにいた。第2のピークは55～59点にあり、7名の学生がいた。次いで、45～49点のところに6名、50～54点と35～39点のところにそれぞれ5名となっていた。30点から74点までの中間層を見てみると、60点から74点までの上位の層が激減してわずか3名、45点から59点までの中位の層に18名、30点から44点までの下位の層に23名となっていて、25年度は特に中下位の比重が大きかった。中間層以下が51名中48名を占め、かつてはある程度存在していたそれ以上の層がほぼ消滅してしまったのは前年と同じであった。29点以下のほとんど基礎力のない学生は4名（前年は9名）に減っていたが、中間層上位の層も減っていたことで相殺され、前年と同程度の平均点となっていた。25年度は中間層中下位に特に多くの学生が集中しているという傾向がよく見てとれた。90点以上のかかなり基礎力のある学生はひとりもいなかった。最高点は88点、次いで82点、80点、70点と続いていた。

次に、平成 26 年度の結果について見てみたい。66 名が受験し、全体の平均点は約 55.7 点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表 13 である。

表 13 平成 26 年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	66 名	約 55.7 点

受験者数は 15 名増加、平均点は前年と比べ 9.9 点の上昇であった。過去三年続けて最低レベルに留まり、平均点 45 点前後という短大がかつて経験したことがない低レベルに悩まされていたが、今回一気に跳ね上がった。10 点近い上昇というのは過去に例がなかった。なぜこのような結果になったのであろうか。得点分布グラフを見てみると、ピークは 50～54 点のところであり、11 名の学生がここにいた。その前後の 55～59 点に 5 名、45～49 点に 6 名おり、大きな集団を形成していた。ピークが 10 点上がっていることと、第 2 のピークがふたつあり、65～69 点と 30～34 点のところにそれぞれ 8 名いることが 26 年度の特徴であった。前年までは、ピークより下位の層の人数が上位の層よりも多く、グラフの形が下膨れしていたが、26 年度はそれが逆転していた。30 点から 74 点までの中間層を見てみても、60 点から 74 点までの上位の層に 13 名、45 点から 59 点までの中位の層に 22 名、30 点から 44 点までの下位の層に 12 名となっており、前年が上位の層がわずか 3 名、下位の層が 23 名だったことを考えると、ここに 26 年度の躍進ぶりがうかがえた。29 点以下のほとんど基礎力のない学生は 6 名、90 点以上はかなり基礎力のある学生は 5 名であった。この年度には、一般入試（薬学部・理学部）の短大第二希望で入学した学生が 16 名（坂戸キャンパス 12 名、紀尾井町キャンパス 4 名）おり、もともと短大第一希望であった 50 名の学生との得点の比較をしてみた。短大第一希望者 50 名の平均点は 51.1 点であるのに対し、短大第二希望 16 名のそれは 70.3 点とずば抜けて高かった。90 点以上の 5 名（内、紀尾井町キャンパス 1 名）はすべて第二希望者であった。このことから分かったことは、26 年度のもともとの短大希望の学生のレベルはここ数年の中では一番高く、更にレベルの高い短大第二希望者を加えて全体で前年より平均点 10 点の伸びになったということであった。短大第二希望者がレベルを引き上げた例は平成 22 年度にもあったが、当時は文系学部不合格の学生たちであり、数値的に見ても 26 年度ほどの衝撃ではなかった。薬学部・理学部を不合格になったとはいえ、受験勉強を経験してきたということがこれほど基礎力確認テストの得点の差になって表れるのかということを改めて実感させられる結果であった。

次に、平成 27 年度の結果について見てみたい。65 名が受験し、全体の平均点は約 48.0 点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表 14 である。

表 14 平成 27 年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	65 名	約 48.0 点

受験者数は 1 名減、平均点は前年と比べ 7.7 点の下落であった。前年に 10 点近く上昇したので期待されたが、残念ながら大幅に下がってしまった。大きく上昇した翌年は必ず大きく下降するのはなぜであろうか。得点分布グラフを見てみると、ピークは前年と比較して 20 点下がり、30～34 点のところに 12 名の学生がいた。第 2 のピークは 50～54 点（前年のピーク）のところにあり、10 名となっていた。このふたつの山だけで 27 年度のレベルが想像できるが、更に詳しく中間層も見てみたい。30 点から 74 点までの中間層を見てみると、60 点から 74 点までの上位の層に 15 名、45 点から 59 点までの中位の層に 18 名、30 点から 44 点までの下位の層に 19 名となっており、やはり中下位層の膨らみが目立った。前年が上位の層に 13 名、中位の層に 22 名、下位の層に 12 名だったことを考えると、下位の層の 19 名、特に 30～34 点のピークにいる 12 名が平均点を押し下げていることが分かる。29 点以下のほとんど基礎力のない学生は前年より 3 名増えて 9 名、90 点以上はかなり基礎力のある学生はゼロ（前年は 5 名）であった。80 点以上も 3 名しかおらず、最高点は 88 点（紀尾井町キャンパス）、次いで 82 点が 2 名であった。

最後に、平成 28 年度（昨年度）の結果について見てみたい。55 名が受験し、全体の平均点は約 49.4 点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表 15 である。

表 15 平成 28 年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	55 名	約 49.4 点

受験者数は 10 名減、平均点は前年と比べ 1.4 点の上昇であった。前回は 7.7 点の下落であったので、やや不安があったが、前年とほぼ同程度の水準となった。得点分布グラフを見てみると、ピークは前年と比較して 5 点上がり、35～39 点のところに 8 名の学生がいた。第 2 のピークはふたつあり、一つ目はピークのすぐ上の 40～44 点のところに 7 名の学生がいて、ピークと合わせて大きな集団を形成していた。もうひとつの第 2 のピークは 50～54 点のところにあり、同じく 7 名となっていた。30 点から 74 点までの層を中間層とし、60 点から 74 点までの上位の層と 45 点から 59 点までの中位の層と 30 点から 44 点までの下位の層の 3 つに分け、更に詳しく見てみると、昨年度は、上位の層に 8 名、中位の層に 15 名、下位の層に 19 名となっており、やはり中下位層の膨らみが目立った。ピークと第 2 のピークを含む下位の層の 19 名が大きく平均点を押し下げていることが分かる。昨年度の特徴は、80 点以上の学生が、坂戸キャンパスに 5 名、紀尾井町キャンパスに 1 名の計 6 名（前年は 3 名）いたことであるが、29 点以下のほとんど基

礎力のない学生が7名おり、相殺される結果となっていた。最高点は96点（2名）、次いで90点、紀尾井町キャンパスの最高点は88点であった。坂戸キャンパスの平均点は49.3点、紀尾井町キャンパスの平均点は49.8点となっていた。

3. 今年度の結果について

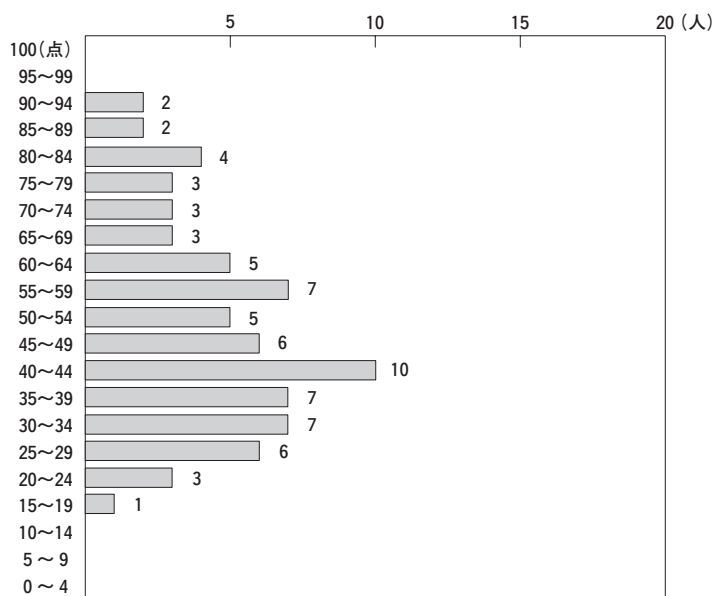
今年度もこれまでと同様に、出題形式は全問マークシート方式、試験時間は1時間、全50問で100点満点の試験とした。外国人留学生を除く74名が受験し、全体の平均点は約50.3点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表16である。

表16 平成29年度英語力調査結果（4月実施）

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	74名	約50.3点

受験者数は19名増、平均点は昨年と比べ0.9点の上昇であった。今年度は日本人学生の数が増加したので期待していたが、昨年とほぼ同程度の水準となった。まずは得点分布グラフを見てみたい。

平成29年度英語力調査結果得点分布グラフ（4月実施）



ピークは40～44点のところにあり、10名の学生がここにいる。昨年度のピークは35～39点であったので、5点上昇している。第2のピークは3つあり、一つ目は、ピークのすぐ下、昨年のピークの35～39点のところに7名、二つ目は、そのすぐ下の30～34点のところに7名と

なっており、ピークを含めたこの3つが大きな集団を形成している。3つ目は55～59点（平成26年度のピーク）のところに同様に7名となっている。30点から74点までの層を中間層とし、その中の上位の層（60点～74点）と中位の層（45点～59点）と下位の層（30点～44点）を詳しく見てみたい。上位の層は11名、中位の層は18名、下位の層は24名となっており、下の層に行けば行くほど数が多くなり、グラフの形も下膨れしたものになっている。75点から89点までのある程度基礎力のある学生の層は9名おり、90点以上のかなり基礎力のある学生2名を加えて11名の本学のトップ集団を形成しているが、29点以下のほとんど基礎力のない学生が10名おり、相殺される結果となっているのは昨年と同じ傾向である。坂戸キャンパスの平均点は50.9点、紀尾井町キャンパスの平均点は49.1点となっている。最高点は90点が2名で、坂戸に1名、紀尾井町に1名となっている。

4. 問題の検証

次に、実際に出題された問題を検討し、正解率の高かった問題と低かった問題について特に気づいた点を検証していきたい。

まず、正解率の高かった問題は10番であり、正解率は79.7%であった。

(10) A : I don't know () Central Park is.

B : It's not far. I'll show you.

1. who 2. when 3. where 4. whose

不正解者は、選択肢1, 2, 4と均等に分かれていた。

次に正解率の高かった問題は45番であり、正解率は75.6%であった。

(45) どの列車がボストン行きか教えていただけませんか。

Could you (① goes ② train ③ to ④ me ⑤ which ⑥ tell) Boston, please?

1. _ ④ _ ② _ _ _ 2. _ ③ _ ⑥ _ _ 3. _ ① _ ③ _ _ 4. _ ⑥ _ ② _ _

過去15年間の英語力調査において、この問題がベスト5に入ったことは今までになかったもので、只々驚いている。4人中3人は最低限の基礎力は身につけていることが分かった。

次に正解率の高かった問題は1番であり、正解率は74.3%であった。

(1) A : Do you know what language is () in Mexico?

B : Yes. It's Spanish.

1. thrown 2. lent 3. spoken. 4. told

正解3以外は1, 2, 4とほぼ均等に分布していた。

以下の2番と37番も正解率は同じ74.3%であった。

(2) A : Excuse me. Can you tell me the way to the post office?

B : Sure. () straight down the street. It's on the right.

1. Break 2. Catch 3. Go 4. Put

この問題も不正解者は 1 と 2 と 4 にほぼ均等に分かれていた。

(37) A : I'm sorry to be late. The bus didn't come on time this morning.

B : ()

1. This afternoon. 2. Don't worry.
3. Yes, you can. 4. No, I didn't.

この問題も初めての登場であった。今までは会話文が上位の正解率になることはなかったので意外な感じがする。学生の英語力の傾向が変わってきているのかもしれない。

反対に、最も正解率の低かった問題は 18 番であり、21.6%であった。

(18) If it () tomorrow, I'll probably stay home and read.

1. rainy 2. rains 3. raining 4. to rain

毎年同じ傾向であるが、今年も 4 割近くの学生が選択肢 1 を選んでおり、次いで 3 が 27%となっていた。be 動詞がないのに形容詞や ing 形を選ぶという基礎力の不足が明らかになっている。

次に正解率の低かった問題は 26 番であり、22.9%であった。

(26) Be kind () old people on the train.

1. at 2. to 3. of 4. from

6 割以上が選択肢 3 を選んでいた。ここも毎年同様の傾向が見られる。

次に正解率の低かった問題は 15 番であり、24.3%であった。

(15) I just bought a new swimming suit. Now I'm ready () summer.

1. for 2. along 3. at 4. on

選択肢 3 か 4 を選んだ学生が 6 割以上を占めていた。4 人に 3 人以上が be ready for を知らない。

次に正解率の低かった問題は 35 番であり、25.6%であった。

(35) A () of children are playing in the park.

1. number 2. center 3. middle 4. way

この問題も初めての登場であったが、a number of を理解している学生は少なかった。不正解者は均等に分かれていた。

1 番から 35 番までは基本的な文法・語法、36 番から 40 番までは会話、41 番から 50 番までは日常的な作文の力を見る出題をした。どの問題も短大で勉学を行うのに必要な最低限の基礎力が備わっているかを見るために出題したが、得点下位の学生は、基本的な文法・語法が弱く、中学校レベルでつまづいて、それが英語嫌いの原因のひとつになっていると推測される。

5. 1月実施の英語力調査およびTOEICテストの結果について

これまで、4月に実施された英語力調査を基にして、今年度の学生の英語力を分析してきたが、1月の後期の最終授業時に前回と全く同じ条件で同じ試験を実施し、どの程度スコアが伸びたかを調査した。第1回目（4月実施）と第2回目（1月実施）のテストの平均点と得点差をまとめたものが表17である。

表17 英語力調査結果比較

第1回目	第2回目	得点差
約 50.3 点	約 52.3 点	プラス 2.0 点

第2回目（1月）は70名が受験し、平均点は52.3点で、第1回目より2.0点の上昇であった。平成20年度以降の得点差推移を見てみると、20年度はプラス1.7点、21年度はプラス4.0点、22年度はプラス3.8点、23年度はプラス4.7点、24年度はプラス5.0点、25年度はプラス2.3点、26年度はプラス2.7点、27年度はプラス4.9点、28年度はプラス0.9点となっており、今年度のプラス2.0点は今までの中でも低い上げ幅であった。得点分布グラフについては、ピークは依然として40～44点のところにあるが、4月の10名から1月には16名と大幅に増加していた。中間層については、60点から74点までの上位の層に12名、45点から59点までの中位の層に17名、30点から44点までの下位の層に22名となっており、4月の下膨れした形からは改善されていない。しかしながら、4月の第2のピークであった35～39点の学生数は7名から2名へ、同様に第2のピークであった30～34点の学生数も7名から4名へと減少しており、ここにいた学生が学力をつけ、ピークの40～44点へ流れ込み、平均点を上げた一因となったのではないかと思われる。

また、今年度も、12月に本学で実施された第4回TOEIC IPテストを受験するように指導し、短大1年生55名が受験した。全学との比較は表18の通りである。

表18 第4回TOEIC IPテスト結果

学 部	受験者数	平均点
短 大	55 名	249.0 点
全学（短大含む）	264 名	304.4 点

短大を含む全学で264名が受験し、平均点は304.4点であった。昨年同月の全体の平均点が286.3点であったので、全学的に英語の学力が上がっているのが分かる。短大の平均点は249.0点であり、昨年の237.6点を11.4点上回っている。短大1年生の最高点は390点（昨年は340点）、

300 点以上の学生は 10 名（昨年 は 3 名）であった

6. おわりに

最後にもう一度、全体の調査結果を振り返り、今後の英語教育の指導について考えてみたい。平成 14 年度からの全体の平均点の推移を見てみると、14 年度：56.9 点、15 年度：54.5 点、16 年度：50.5 点と年々下降の一途をたどり、17 年度に 56.5 点といったん上昇に転じたが、18 年度に 48.3 点と大きく下げ、19 年度：51.0 点、20 年度も 51.0 点と戻したが、21 年度は 46.0 点と下げ、22 年度は 53.5 点と大きく上昇したが、23 年度は 43.7 点と過去最低を記録し、24 年度：44.9 点、25 年度：45.8 点と 3 年連続で 45 点前後の低水準で推移し、26 年度に 55.7 点と 10 点近く上昇したが、27 年度に 48.0 点と 7.7 点下落し、28 年度は 49.4 点、今年度は 50.3 点であった。途中の上げ下げはあるが、平成 14 年度からの 16 年間で短期大学生の英語力は 6.6 点下落したことになる。平成 23 年度から 3 年間続いた過去最低水準からは脱した感はあるものの、平成 14 年度のレベルにはまだ遠い。日常の授業時においても、中学校の早い段階で英語につまずき、英語嫌いになり、無気力になってしまった学生の数が年々多くなってきていると感じている。今年度は夏休みの米国マネジメント研修に 8 名の参加者が、春休みのマレーシア語学研修に 10 名の参加者が出たことは大変喜ばしいことであると思う。このような短期語学研修をきっかけにして、英語や外国の文化に触れ、英語に対する意識を高め、英語嫌いを少しでも克服しようとする学生が増えれば、学生にとっても短期大学にとっても良いサイクルが生まれてくるであろう。

